

# 日風堂周

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第19号 1996年4月1日

## 二つの古代塗

東京国立博物館資料部  
研究指導室長

加藤 寛

高知県には古代塗という漆器が伝えられている。古代塗は、漆器の表面に下地を盛り上げてレリーフ状の文様を作り、その上に朱や黒の色彩をほどこして仕上げる漆器である。土佐の古代塗は、高岡郡佐川町の種田豊水(たねだ ほうすい)を創始者とする。豊水は、山口県に生まれ京都の小田海僊(おだ かいせん)に日本画を学び、さらに会津(福島県)で蒔絵(まきゑ)を修得した。彼の蒔絵は、黒漆の上に黄金の花鳥画を描いたものが多い。土佐の古代塗は彼の指導で弟子達が完成する。古代塗という漆器が静岡県蒲原町(かほら)にも存在することを知り、土佐の古代塗との関係を調査した。蒲原町に伝えられる古代塗の記事をまとめると概ね次のようになる。

天保十年(一八三九)頃、僊智(せんち)という仙台藩の藩士が病氣療養のために蒲原に滞在した。僊智は、病氣快癒の後も蒲原にとどまり、子供たちに武芸や学問を教えながら漆器を作り、僊智塗と称した。明治元年、僊智は亡くなり同十一年に古代塗と改称した。古代塗は、明治三十年以降大量に生産され、生産額も昭和初期には年額三千

円にもほり、アメリカをはじめとして海外に輸出された。戦前まで盛んに生産されていた古代塗も、戦禍で職人を失い戦後は生産されていない。土佐の古代塗もまた、戦前戦後にかけての盛況をいま見ることができない。古代塗にかかわる豊水と僊智という同時代の作家たちによって二つの塗り方が考案されたのは興味深いことだ。

現在、「僊智山人」銘の漆器は、蒲原町の五十嵐家に二点遺されている。作品は、ともに同じ文様で一点は土佐の古代塗と同じ堆彩漆(つみせりしつ)、もう一点は木彫りに彩漆をほどこしている。僊智作の「唐草人物古代塗方盆」には、天使、獅子、蛇、唐草など当時としては斬新な文様が描かれている。天明元年(一七八一)に発刊された「装剣奇賞(まうけんきしょう)」の挿図に、この文様の手本になった図案が収録されている。(巻之六「人形手」)「装剣奇賞」は、飾金具師の系譜、鞘塗(さやぬり)、印籠(いんろう)、根付(ねつけ)、革など刀装に關してまとめた教本として広く流布していた。私は、僊智が盆を制作した時に革製品の図案として描かれたこの文様を転用したと考えている。革製品は、

篋(たがね)や鑿(たがね)で文様を打ち出し、金銀箔を押し、透明な漆を塗り、唐革(からかわ)もしくは金唐革とも呼ばれる。革製品に見られる浮彫り風の文様には、古代塗の特徴である下地の盛上げとの共通性も見られる。僊智の考案した漆器は、唐革細工の浮彫りを漆芸技法に転じた表現であった。

土佐と駿河の二つの古代塗の名称は、佐川町出身でちに蒲原町に移り住んだ田中光頭(たなか みょうず)と深い関わりがある。光頭は、宮内大臣を辞した明治四十三年、静岡県富士川町に敷地約一万坪の「古溪荘」を築き、自適の生活をする。しかし、大正七年の米騒動で住民から批判を受け、隣接する蒲原町に「宝珠荘」(後に青山荘と改称)を建て余生を送った。光頭はまた、明治三十四年に品川弥次郎のあとを次ぎ日本漆工會の会頭に就任し、久能山東照宮修理などの事業を積極的に行っている。光頭が富士川から蒲原へ移住した大正十二年には、古代塗は静岡県を代表する特産品であった。さきに挙げた光頭の事績や漆芸に対する興味からも、故郷佐川町で生まれた漆器に命名する機会もあったと考える。古代塗にまつわる土佐と駿河の關係は、光頭によって結びつく。静岡県は、かつて光頭が仕えた山内・深尾両家の出身地であることも何かの縁であろうか。

# 企画展 『土佐藩主山内家の名宝Ⅱ』 によせて

下村 公彦

当館では本年四月十九日から企画展『土佐藩主山内家の名宝Ⅱ』を開催する。本展は、勅土佐山内家宝物資料館の全面的な御協力を得て実現したもので、二、三月の資料受贈・受託記念展『土佐藩主山内家の名宝Ⅰ』の続編である。

今回は歴史藩主に直接関連した資料を中心に紹介したが、今回は古文書や美術工芸品の各分野ごとに「名品中の名品」百三十余点を厳選して展示する。以下、本展の概要を分野別に紹介させて頂く。

〈古文書〉 古文書の中では、まず第一に長宗我部地検帳（全三六八冊・重要文化財）があげられる。本帳は、豊臣政権下で長宗我部元親が天正十五年（一五八七）から実施した検地によって作成されたもので、山内氏もこれを領内支配の基本台帳として活用・保存してきた。本展では、その一部を紹介する。その他、山内一豊が土佐入国以前に拝受した豊臣秀吉朱印状や徳川家康書状があり、二代藩主忠義の野中兼

山宛書状も出陳予定である。

幕末の史料では、山内容堂宛大老奉書（第二次征長関係）や「備後鞆津二於テ才谷梅太郎紀州高柳楠之助ト応接筆記」（イロハ丸事件関係）などが注目されるものである。



長宗我部地検帳（高知県立図書館蔵）

筆になるとされる一字書「神」の他、九代豊雅・十二代豊登等々の一行書が並ぶ。また、「黄檗三筆」の一人木庵性瑨や儒学者細井広沢の雄渾な作品、それに片桐石州・沓庵宗彭・小堀遠州



小栗宗湛筆「松樹」

らの優雅な茶掛も列品予定である。絵画では、小栗宗湛・狩野探幽・狩野常信それに中山高陽らの名作を展示する。中でも宗湛については、彼の確実な遺品は極めて少ないといわれているが、今回展示する「松樹」には彼の別号「自牧」の落款があり、注目される。

〈武器・武具〉 武器の中では、まず「一国兼光」の名で知られる太刀・銘備前国長船兼光（重要文化財）が第一にあげられよう。この太刀は山内家の家宝ともいべきもので、昨秋の企画



備前国長船兼光 文和4年（1355）

展「土佐 歴史と刀剣」においても脚光をあびた作品である。

甲冑では、三代忠豊や十五代豊信（容堂）所用の具足（いずれも茶糸威二枚胴具足）の他、四代豊昌所用の兎耳形兜も陳列する。兎耳形兜は、山内家の変り兜の中でも特にユニークな形状をしたものである。

へ漆芸品・茶道具） 漆芸品や茶道具には種々の名品が多く、今回の展示の一つの主役であるといえよう。

漆芸品の中で特筆すべきものに、若松葵紋蒔絵雜道具一式がある。本資料は、慶長十年（一六〇五）徳川家康の養女阿姫が二代忠義のもとへ輿入れの際持参したものとわれ、婚礼調度の品々の精密なミニチュアである。また、川谷勘山作の蒔絵地球儀も非常に珍しい資料である。

調度品や茶道具類では、籬菊蒔絵螺鈿硯箱・朝顔蒔絵螺鈿沈箱・高台寺蒔絵炉緑等々が漆芸品中の優品である。

土佐藩では四代豊昌のとき石州流が採用され、元禄期を中心に茶道が隆盛



まがききくまきえらでんすすりばこ  
籬菊蒔絵螺鈿硯箱

したといわれ、石州好面取風炉・同旅簞笥などが残っている。有名な青磁蓮弁文茶碗も、この頃本川郷で発見されて藩主に献上されている。

本展では右の佳品の他、古天命平達摩釜や萩焼・薩摩焼等の茶碗も出陳予定で、九代豊雍の頃のものとされる不白好平棗なども展示する。



くろらしゃみつがしわもんじんばおり  
黒羅紗三柏紋陣羽織（山内豊房所用）

〔染織品〕 染織類では、二代忠義所用の白羅紗陣羽織、五代豊房所用の黒羅紗三柏紋陣羽織、それに初代一豊の所用と伝えられる有名な南蛮帽も展示する予定である。

以上、企画展『土佐藩主山内家の名

宝Ⅱ』の主な展示資料を紹介してきたが、いずれも舌足らずの解説に終始してしまったことを反省している。この足りないところは、実際に展示物を御覧頂き、それぞれ鑑賞者自身の目で補ってもらいたい。というより、「名品」というものは、あくまで解説は従で、実物の「見たまま」が主であろう。ぜひ本展にも足を運んで頂き、「名品」を確かめて頂きたい。

なお、五月十一日には東京国立博物館の加藤寛氏に「山内家の漆工品」と題して御講演頂く予定である。広く美術工芸品の見方についても参考になるお話がきけるはずなので、多くの方々のお聴講を念願する次第である。

#### 付記

前回の企画展開催期間中に「山内家の名宝を二回に分けず一挙に公開できないか」との御意見を拝聴しました。当館企画展示室のスペースの関係でやむを得ずこういう形をとりました。一挙公開は、勅土佐山内家宝物資料館の新館構想実現に期待したいと思えます。

なお、当館でも平成八年度の特別巡回展「新発見考古速報展'96」と「秀吉と桃山文化」では、三階の常設展示を撤去して開館五周年記念展を挙げる予定です。御期待下さい。

ひと6

# 馬場 俊清 さん

今回の「ひと」は当館の資料調査員として活躍いただいている馬場さんにお話をうかがいました。

馬場さんは、新聞への投書をこれまでに二百回以上、海外を含めた大勢の文通仲間と頻繁に手紙をやり取りし、年賀状には銘々違う川柳を書き送り、毎年その数二百句にもなるという、とにかく「書くことが好き」な方です。

民具への思いにはじまり、中学校の先生をなさったご経験からの教育論、七、八年前から参加されている古文書を読む会のことなど馬場さんのお話は尽きることなく、八六歳とは思えないバイタリティーに圧倒されっぱなしのインタビューでした。(野本・中村)



## 民具に対する思い

このことは言いとうてたまらんことですが、個人で貴重なものを保存するのは浅はかだということです。災害が起こったときや代が替わったときにどうなるか。特に私が大事に思う農具なにかだと、価値がわからんから焼かれてしまう。

もうひとつ言いたいのは、自分だけが大事にして自分だけが楽しもうというのはケチくさい考えやということよねえ。大勢の人に公開して社会教育に役立てるといふ開かれた心を持たないかん。民具に限らず貴重なものは公共の施設へ寄贈、寄託することですよ。そういうわけで私も民具を歴史へ寄贈したんです。

民具が大事なものは、生活がしみ込んでいふからだと思ふねえ。ちびた鞆をみると、なんぼか苦労したろうその人の生活がにじみ出ておる。その人をいとおしいという気持が込み上げてくるんですわ。ちびてしようたところに価値があるわけよねえ。

例えば機械製と違い、手ひねりの茶

碗には手の温もりがある。昔の農具も誰かが手でこしらえて、私なんかも手で使ったわけです。手垢がにじんんでいるので愛着がある。自分が握ったものでなく、昔の人が握ったものでも温もりが伝わってきてなつかしく思います。

数年前行った榑原の資料館は鋸なら鋸、鞆なら鞆と同じ種類の民具をよが集めておる。私はそこに感激しました。使った人が違うのだから、なるべく多くの民具に登場してもらうべきだ。だから同じ種類の民具をたくさん展示しておるのを見ると愉快です。一つあるから良い」ではダメ。岡豊の歴史でも民具をどんどん貰うてあげて下さいや。

それから民具はいつ誰がどうやって使ったかが分かっておらんといかん。植物採集と一緒に。民具を使った人、作った人にとっても名前が遺されるといふことは幸せなことだと思ひますよ。庶民の名前というものは、死んだら直に忘れられてしまう。けんど公共の施設に寄贈された民具なんかだとその人の名前が一緒に遺る。

## 民具を観察する

私は長いこと理科の教師だったので、個人の知恵や工夫、物理的な仕組みにも興味があります。民具の仕組みはわかればわかる程感心して面白くなる。

例えば引き白は上下ふたつの白が重

なっておる。その隙間は中央に近いほど広くて端に行くほど狭くなっている。それで内側では粒が太いが、白を回すと外にいくほど細かい粉になる。使っている人は知らないかもしれないが、作る人はよく考えて作っていますね。船に乗って見ていると、船の船なんかも実によくできておると思う。船は途中で曲がっておるでしょう。それに断面が三角になっていて、櫂を押し引きすると、斜め右後ろへ斜め左後ろへと波をせっていく。スキーやスケートのような理屈やなあと思います。

昔から使われている民具は、長いこと工夫して、試行錯誤をやつて完成されていますねえ。

話ばかりですが、昔の道具はもちろんだ大事ですけども、今の風景の写真や道具などもあわせて残さないかんと思ひます。どんどん変わっていくゆゆのに案内点になっている。私は自分が使った瀬戸物の茶碗などを防空壕へ埋めて保存しようんです。

何百年も先の人に感謝されると思うよ。

## 知恵や工夫が育まれる環境

自分が工夫したことより先輩や上級生に教えられたことの方が多しねえ。

子どもの頃、近所のいちゃんに山に連れていってもらうがはそりやあ嬉し

かった。そんなとき、にいやんなちがやることを見よう見真似で覚えたものよ。大人が使う道具は子どもも使うたしね。ナイフも遊び道具のひとつだった。今は親が危ない言うて持たせんでしよう。技術を見て覚える機会も無くなり、次に伝わらなくなつて惜しいねえ。

例えば今の人は知らんかもしれんが、竹をきれいに切る方法がある。鎌の柄の本を胸にあてて押しながら、鎌の刃に乗せた竹をぐるりと回す。そりゃあきれいな切り口がでますよ。子ども頃私は鎌一丁でなんでもやった。山では鎌で芋をそいで食べたり、小鳥を捕るワナをつくったりしたね。後世に伝えてもらいたい方法がいくらもありますねえ。

昔は農家のお母さんなんかは誰でも機を織れたですわ。機織りは大きな手仕事でしょう。それをやつのけよつた。そんな技術は今ではほとんど残つてないやないですか。文明は進んでいきゆうけど、手による文化は衰退の一途をたどつているように思います。現代は育児も手抜きですよ。子どもに着せる服も機械でつくられた既製品で、バックに入ったようなものを食べさせお母さんも多いでしょう。手間をかけないんですよ。人間が合理的な機械に近づいている。だからいじめが起きるんです。

育児は小さいときから手をかけるということが大事なんですよ。例えば、潮干狩りや魚釣り、キャンプなどして、野山へ子どもを連れ歩くということもそのひとつですね。そうやって親子で触れ合う。

#### 中学校の教師として実践したこと

私は昭和三八年に構原の中学校におりましたが、悪いことをするいうて学校で嫌われておる子があつてね。そういう子を連れて日曜日には山に行きましたよ。一緒に行つたら天真爛漫でね、実に面白い。木へ登つてみたりハラハラすることをするが、嬉しゅうてたまらんのでしよう。ボス格の子と天狗高原に行つたり、夏休みにうちのミカン畑のアルバイトに来てもらうた子もおつた。そんな風と一緒に遊びに行つたり、寝食を共にしたら他の教師が言うような悪い子やないことがわかるんです。

登校拒否の子があつて、出席日数を満たすために「芋を食いたいのが明日の朝もつて来てくれんか」などと頼み事をしました。次の日、もつて来たその子が教室に入ったから出席としたわけです。その子があつて来た箱の中には芋アケビが入つておつて、「先生これは芋アケビいいです」いうて女生徒が教えてくれました。雨降る日じやつたが、

山へ行つてアケビを取つて来た。そこまでしてくれたかと嬉しかった。勉強はできんかったけど、その子は大阪で工事請負会社の偉い手になりましたよ。

今、先生と生徒の間がしつくりいってない。それは一緒に遊ばんからいかんのじやと思ふんです。殊に悪いことする子と遊ばないかん。教師が教壇の上から教えることは、毎日のことで栄養になることですが、子どもにはなかなか残らんです。残るのは山へ行つたり、修学旅行とかの非日常的なことです。教師は生徒に忘れられたらそれつきりですよ。どれだけ子ども心に食い込むことができるかです。

教師は生徒の伸びゆく魂を育てる仕事でしよう。極端なことをいえば、若いうちには、企業に入つて品質管理や営業をやつて、その後で役場で書類作成と経理をやつて、更に福祉施設で障害者や老人の世話をするなどして、五〇歳になつたら資格試験で教師になるようにしたらどうでしょう。広い視野を持つ、すいも甘いも噛み分けたい教師になると思ひますよ。

#### 最近取り組んでいること

今は古文書を読んでいます。午前二時に起きて四時間くらい読みますね。一回読んでわからんことも、二回、三回と読むとわかるようになってきます。

年をとつてから土佐市の市民図書館の古文書を読む会に入つてやり出したのだけど、進歩するものです。今では会のリーダーをやらしてもらつています。地震と津波と火事のことを書いた『三災録』を高知市民図書館で写真で撮つて来て、次のテキストを作つてるところです。その前には自由民権記念館に寄贈される前に複写させてもらった上田家史料も読みましたよ。

それに書くことはずつとやつております。私は人というものは死ぬる人もおれば死なん人もおると思ふ。人に覚えられている間は人の心の中に生きておる。さつきも言うたが生徒に忘れられたら教師としての命はおしまいです。死なない方法のひとつが自分の考えや調べたことを活字にしたり、本にすることです。本を開いたときに活字が語りかけてくるから、本の中に本人はいつまでも生きておる。私は新聞へも投書しようが、それは命のかけらを残していきゆうのです。

それから私が生きていく上で大事だと思つておるのは、好奇心を失わないことです。好奇心は向上意欲ですから、失つたらおしまいです。誕生を左にしてグラフを書く、大概の人は年を取るにしたがつて右下がりになる。しかし、私は右上がりに生きております。

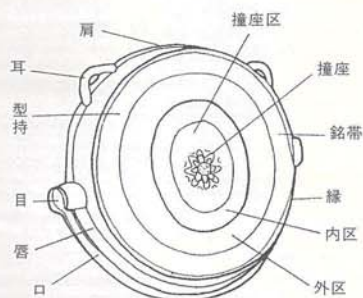
# 土佐の鰐口(1)

— 研究史 — 岡本 桂典

1

鰐口(わにぐち)は、神社仏閣の堂の軒先に懸けられ、その前面に鉦の紐という布繩を垂らし、参詣する人々が諸願成就を祈念して、手で紐を引き、振って打ち鳴らす鳴器である。

鰐口の形は、偏平な円形をなしており、鉦鼓を二つ合わせたような形をしている。大きさは、一〇センチに満たないものから、径一五〇センチの大形のものもあり、一般的には二〇〜三〇センチのものが多い。



鰐口の名所

坂詰秀一「図録歴史考古学入門辞典」(柏書房 1991年による)

鰐口という呼称は口が広く裂けているので、これを鰐の口に見立ててこの名称がついたと考えられている。

鰐口は鑄銅製や鑄鉄製で、正面に撞座(つきざ)があり、圏線により撞座区・内区・外区・銘帯に分けられる。

縁の上方二箇所に半円形の突出した耳(吊り手)がある。耳の下には、突出する目があり、縁に沿って大きく割れた口がある。型持は、一般に左右の銘帯や内・外区に二箇所ほどあり、鑄型と中子を接着するための鉄片の支えの跡である。

さて、この鳴器には鰐口という名称他に「金口」「金鼓」「打金」などの呼称があることが、鰐口に記された銘文より知られている。鰐口の呼称の初見は、正徳六年(一一九三)銘の宮城県大高山神社の鰐口(重文)である。

この鰐口の源流は、朝鮮半島の禁口・飯子に求められるとされているが、相違点も多い。なお、最古の紀年名をもつ鰐口は、長野県松本市宮淵出土の

長保三年(一一〇一)銘(東京国立博物館蔵)の鰐口である。

2

鰐口を研究する上において、鰐口の所在や銘文等を知るには、その研究史が重要となってくる。そこで、土佐の鰐口の研究史についてみてみることにする。

江戸時代の文献として植木尚斎の延享三年(一七四六)の「土佐國測岳志」下がある。この中で植木は、土佐郡神田村観音堂の両面に紀年銘を有する鰐口について記されている。

武藤致和編著による文化一〇年(一八一三)の「南路志」には、社寺に所蔵されている鰐口の銘文が記されており、江戸時代の金石文史料として重要な位置を占めている。

文化一二年(一八一五)の岡内幸盛「披山風土記」には、横山郷の鰐口について一部記載されている。吉村春峰の「土佐國群書類従」九八(明治一四年へ一八八一)には、佐川町東光寺の備後国の文明十四年(一四八二)鰐口について紹介されている。

また、「高知県神社細帳」にも神社所蔵の鰐口の銘文が収められている。松野尾章行の「皆山集」にも鰐口の銘文が若干紹介されている。

大正八年(一九一九)八月に、武市佐市郎は、「土佐史壇」第四号の付録として「土佐考古志」を単行冊で発刊した。本書には、慶長以前の金石文が収録されており、鰐口の銘文も記載されている。大正以前における資料の所在を知ることのできる資料として学史上においても貴重なものである。

香取秀真は、大正一二年(一九二二)に「金鼓と鰐口」を発表し、この中で土佐の鰐口四二点の銘文を紹介し、さらに鑄師大工についても考察している。木崎愛吉は、「大日本金石史」を発行し、その中には土佐の鰐口の銘文が一点紹介されている。

昭和六年(一九三一)には、「高知県神社誌」が発行され、神社所蔵の鰐口の銘文が紹介されている。昭和七年には、「土佐寺院誌」が刊行され、本書にも寺院関係の鰐口の銘文が掲載されている。昭和一二年(一九三七)には香取秀真が「金文に現れたる鑄物師の本貫」(「考古学雑誌」第二七卷第一号)を発表し、土佐神社所蔵の鰐口の銘文にみられる鑄物師について述べられている。

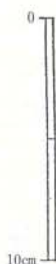
近年の研究では、「高知県新発見の鰐口と経筒」(「いにしえ」第二号一九七八年)や「土佐の鰐口(一)」「(「土佐史談」第一五六号 一九八一年)、そして「土佐国越裏門地藏堂の

鰐口と四国八十八カ所の成立」(『考古学叢考』中巻 一九八八年)などがある。

3

以上、簡単に土佐における鰐口の研究史をみてきたが、鰐口の研究は主体となる銘文が中心になされていることが研究史より知ることができる。これは、一つには中々近世の鰐口に記された銘文が史料として活用できるからでもある。

また、鰐口は当時の信仰資料でもある。鰐口に記された銘文、或いは鰐口



本川村越裏門地藏堂鰐口(文明3年銘<1471>県指定)

自体の存在から当時の宗教の様相の一部を窺うこともできるのである。さらに、近年鑄物師との関係も考慮されるようになってきている。

鰐口には銘文を刻したり、陽鑄したものがあつた。鰐口には、一般的に言う銘文を全く記さないものもある。しかし、銘文がほんとうになつたのだらうか。墨書で書かれたものも存在していたのではないかと思われる。実際、かつて散見した鰐口の中に墨跡が残るものが存在していた。そこで、近年調査する機会を得た鰐口について、研究史も含め、以上の事を考慮しながら紹介していきたいと考えている。

## 本棚

## かぐら 神楽の本

昨年、の史跡めぐり「池川神楽」と「名野川神楽」は大好評で、神楽に関する本を紹介してほしいとの声が寄せられました。そこで、早速探してみました。意外に手頃な本はあまりありませんでした。「全国神楽総覧」みたいな本が出ればきつと売れると思うのですが……。

高知県の神楽研究の第一人者・高木啓夫氏による『土佐の芸能』(高知市文化振興事業団、四八〇〇円)は、土佐の民俗芸能全般を扱った本ですが、土佐の神楽のアウトラインを知るにはもっとも適当な本です。当館館長の吉村淑甫の『土佐の神ごと』(高知市民図書館、三〇〇〇円)にも、岩原神楽、本川神楽、いざなぎ流などが紹介され

ています。田辺寿男氏の『山間—高知の民俗写真2—』(高知市民図書館、五五〇〇円)には、伐畑、山里の正月、弓まつりなどともに神楽の写真も多数掲載されています。

全国版の神楽の本で手頃な値段で入手できる本はありませんでしたが、『民俗芸能入門』(西角井正大、文研出版、一六〇〇円)は、神楽について非常にわかりやすく説明しています。神楽を支える信仰の世界に肉薄するのが、『大荒神頌』(山本ひろ子、岩波書店、二千円)です。神楽を生んだ中世の神々の宇宙を小説仕立てで叙述します。神楽の背後に横たわる神秘的な世界の広がり、神楽へのあなたの興味はさらにかきたてられることでしょう。(梅野)



## 歴史スポット⑨

### くんじょうしつ 燻蒸室

今回から何回かに分けて歴史の裏側を案内します。1回目は搬入口の横にある燻蒸庫です。木や紙などの資料は虫やカビによって破損します。資料保存には、虫やカビを殺すのが第一です。外から運び込まれて来た資料は、まず燻蒸庫に入れ、密封してガスを注入します。ガスは資料に浸透し、中に入っている虫も殺します。ガスを抜いた後、資料は収蔵庫や展示室へ運ばれます。(梅野)

# 4～6月の催し物

## 〔企画展〕

4.19～5.19	土佐藩主山内家の名宝Ⅱ	高知県に寄贈・寄託された山内家の名品の中から、古文書や漆芸品・茶道具を中心に展示します。
-----------	-------------	--

〔講演会〕 午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい（定員100名まで。先着順）

5.11(土)	山内家の漆工品	加藤寛先生（東京国立博物館）
---------	---------	----------------

〔子ども歴史教室〕（当日受付。定員30名。親子可）

4.27(土)	山内家の名宝を見よう	山内家の名宝展Ⅱの内容を、子ども向けにわかりやすく解説します。午前10時～11時30分
6.8(土)	歴民たんけん！	ふだん見ることのない歴民の裏側を、学芸員といっしょに探検してまいります。午前10時～12時

## 〔企画コーナー〕

4.10～8.1	山本家資料(2)-女学校と学徒動員-	山田高等女学校の学徒動員の様子を、山本昭子氏の資料を中心に紹介します。
5.23まで	城田楠子さんの郷土玩具	城田政治さんのご遺族から寄贈された郷土玩具から伏見人形、こけし、東照宮の山車のおもちゃなどを展示。

# 歴民・96・五周年

3階常設展示室のケース・1階企画展示室を活用してビッグな特別巡回展2本を行ないます。

9月15日(日)～10月6日(日)

## 新発見 考古速報展'96

― 発掘された日本列島 ―



香川県香色山経塚経筒・外容器  
(普通寺市教育委員会蔵)



豊臣秀吉画像(大阪城天守閣蔵)

## 秀吉と桃山文化

― 大阪城天守閣名品展 ―

12月3日(火)～平成9年1月26日(日)

## 〔歴民館日録〕

月日	出来事
平成8年	
二月九日	企画展「土佐藩主山内家の名宝Ⅰ」開幕
三月二日	企画展講演会
三月九日	子ども歴史教室「山内家の宝物と高知城見学」
三月一六日	講座「仁淀川の川船」
三月二〇日	企画展閉幕

## 〔訂正〕

18号のニュースで、運営審議会委員の名簿のうち、鍵岡正謹氏が文化財団理事となっておりましたが、県立美術館館長の誤りでした。記しておわび申し上げます。

## 〔訃報〕

資料調査員の都築健康先生（高知市旭駅前町大豊町出身）が一月二日に亡くなられました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

## 〔ひとこと〕

三月の講演会、「わかり易かった」と好評でした。大野先生、ありがとうございました。（下村）

平成八年四月一日  
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783南門市岡豊町八幡1099-1  
TEL 0888(62)2211  
FAX 0888(62)2110

開館時間 午前9時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日) 12月28日、1月4日

入館料 (常設展)大人(18才以上) 400円  
団体(20人以上) 320円  
高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、高知県長寿手帳所持者は無料

印刷・川北印刷株式会社